



蛍光イメージングを用いた 分子標的治療薬効果判定法の開発

北海道大学大学院医学研究科
生理学講座細胞生理学分野
大場 雄介 教授

1996年北海道大学医学部卒業。同大・大学院（病理学専攻）修了。1998-2000年 国立国際医療センター研究所 流動研究員（松田道行研究室）、01-04年 大阪大学大阪大学微生物病研究所 助手、01-05年 JST さきがけ研究員（兼任）、04-06年 東京大学大学院医学系研究科 助手（谷口維紹研究室）、06-12年 北海道大学大学院医学研究科 准教授、2012年より現職。

主催：病理学Ⅰ 清川
kiyokawa@kanazawa-med.ac.jp 内線 3611

CMLは骨髄の造血幹細胞に異常染色体（フィラデルフィア染色体・Ph1）が形成されBCR-ABLが細胞内に出現し発症する血液のがんです。イマチニブ・ダサチニブなど分子標的治療薬の開発は、CMLを不治の病から経口薬でコントロールできる病気へと変化させました。しかし、薬剤無効例あるいは治療途中から無効に転化する症例も少なからず存在します。

大場教授はBCR-ABL活性をモニターするバイオセンサー Pickles を設計し、1細胞レベルで酵素活性を検出する系を構築しました。

9月9日（火）
17時30分から
金沢医科大学病院
本館 C41 講義室